

「なんで?」「でもさー」の魔法の言葉で 思考を深め、「伝え方」もみがく

順天高校（東京・私立）

小林光一先生

教員歴9年。大学卒業後、ドレスショップ営業やサッカー-社会人リーグ（現J3）選手を経て教員に。生徒に頑張れと言う以上は自分も頑張らねばと、日本一の保健の教師を目指すと言っている。



求めるのは、正解ではなく根拠。
答えにたどりつくまでの道のりです。

どんな授業なのか

知っているつもりのこと
より深く多角的に考える

小林光一先生の4月の保健の授業は、毎年「甘いものをたくさん食べたらどうなる?」といった問いかけから始まる。生徒は「太る!」などと答えてくる。そこでさらに問いかける。「なんで?」

小林先生の授業はこれが基本形だ。「保健の学習内容はなんとなく知っている

ることが多いので、「なんとなくわかりそうな保健クイズ」を出題し、まずは生徒をしゃべらせませす。でもその解答には根拠がない。だから「なんで?」と問うと言葉に詰まります。そうして生徒たちに、「みんなが『理解しているつもり』のことは『聞いたことがある』にすぎないことを突き付けます(笑)。それをくり返し、3学期には『なぜそう思うか根拠までちょっと話せるようになった』状態になることを目指します」

授業では1学期からグループ学習も行うが、ここでもおのおのが自分の考えを見つめ直す。そのために小林先生が生徒に授ける魔法の言葉が「なんで?」と「でもさー」だ。グループ内で、ある生徒が意見を出したら「なんで?」と根拠を求めてみんなで「その考えを深める」。あるいはその意見に「でもさー」と何らかの反論を試みて「その考えに対する視点を変える」。

「話し合うときに『深く考えろ』『視点を変えろ』と言っても、生徒はどうすればいいかわかりません。けれども『なんで?』『でもさー』という、オモチャを与える、生徒は面白がってやってみて、そこから議論が広がるんです」

思考を深めることを重視するのは、社会に出たらその営みが大事になる、という実感が小林先生にあるからだ。

「僕は大学まで競技やスポーツ社会学ばかりやっていたので、保健のことは教師になつてから学び直しました。すると、何が健康に良いか悪いかはいろいろ調べ

てよく考えないと判断できず、自分が『理解しているつもり』にすぎなかったのを痛感しました。少し前の僕は、生徒と一緒にだっただけです。保健に限らず、社会に出たら、正解がわからないことを今ある知識で考えなければいけない場面が増えます。だから生徒に求めるのは、正解ではなく根拠。答えにたどりつくまでの道のりを、自分で描けるようになってほしいと思っています」

小林先生はまた、考えたことを「伝える技術」についても、実体験やリアルな教材をもとにレクチャー（左上カコミ記事参照）。そのうえで生徒が論述やプレゼンに挑む機会も増やしている。

「自分の考えを説明することは、どんな仕事でも必要だと思うからです。生徒には、ただ正論を言うのではなく、相手に思いを届けられるような伝え方を身に付けてほしいですよ」



ある授業では、たばこの依存性の怖さを訴えるキャッチコピーを考えたり、教科書の知識に加えて、伝える技術や感性が問われる。



小林先生の授業の主なリソース

1 保健を学び直すなかでの気づき

小林先生は、授業準備として保健のことを「なんで?」の視点をもって最新の情報も追いつながら学び直した。生活習慣、性的問題、労働問題など。そのなかで「知識をもって深く考えないと何が良いか判断できない」テーマが多いのを実感。そこを生徒にも考えさせている。

2 教育学部で学んだ「伝える技術」

小林先生は教員になる前に営業職や記者職を経験。そこでは「大学で教育のために磨いた伝える技術(話の展開の工夫、視線や身ぶりの工夫)が仕事全般に生きた」という。その実社会に生きる「伝える技術」そのものを生徒にも教え、授業の発表や記述に生かせるようにしている。

3 世の中にあるリアルな教材

TV番組の芸人の話し方やテロップ、広告のコピーやデザイン、ビジネス書などから、伝え方や思考法の「型」を学習。それも生徒に伝授している。

4 授業研究プロジェクト

順天高校には、授業を通して生徒の人格や教養を高めることを研究する分掌があり(英・社・理・国・保健体育の先生が所属)、同僚からも学んでいる。

小林先生の授業デザイン

1 導入……身近な話題や対話から入り、授業に集中しやすい環境をつくる。

2 知識提示・理解……教科書の内容を日常生活と絡めた「コバヤシート」や、自作のクロスワード式の用語確認シートを導入。面白がる生徒が増えた。



3 発問……誰も答えは知らず、今ある知識で考える発問をする。「なぜ冬に交通事故が増える?」「なぜ日本は平均寿命が世界一なのか?」等。

4 議論・調査……グループで議論・調査するときは、まとめた意見をフリップボードに記入するのが基本。クイズ番組のようで生徒ものりやすい。



5 表現……お互いの発表を批評し合うこと(上の写真右)や、みんなの前で発表して批評をもらうことで、伝え方をみがく。3学期最後にはクラス全員でオリジナルの教科書作りに挑戦。一人2ページを自由に表現する。



生徒はどう変わったか

授業で学んだことを何につなげるかまで考える

こうした授業を受けてきた生徒たちの変化は、3学期最後の振り返りシートに寄せられた感想に見てとれる。「知識がないと考えることができなかった。疑うことも大切だと思いました」「生活に役立つ知識が身に付いて誰かに話したくなって、水曜日の夕食は習ったことを母に話す時間になりました。保健の知識だけでなく、自分の考えをも

つ力、それを見せたり聞かせたりする力、多くのことが身に付きました」「正直、最初はなんで先生は(自分の記述に)晴れ(高評価)をくれないんだろうと思いました。中学では評価してもらえなかった。その分、晴れをもらえたときは本気で喜びました。「わかった」だけで片付けない。何かを学んだあとに、自分がそこから発展して何を考えられるか、何につなげられるかが大切だと教えてもらうことができました」「1年前の自分が今の僕を見たら驚くと思います」

今後行いたい授業

多様な題材と活動を通して生徒全員が活躍する授業に

小林先生が今関心を強めているのは、ロジカルシンキングやプレゼンなどの「型」をよりきっちり教えることだ。「日常で考えたり言い合ったりする機会が減ったからか、思考や伝え方の基礎から身に付いていない子が増えたように感じています。スポーツもそうですが、まずは『型』を示し、それを生徒が自分のものにしていくのも有効ではないかと

考えるようになりましした」

もう一つ目指しているのは、クイズ、正解のない問いを考えるグループ学習、レポート、プレゼン、テストなど様々なアウトプットの間を創出することで、成績の良い子からビリの子までいろいろな生徒が活躍できる授業にすることだ。「僕自身も、生徒も、『あの子はこれが得意でこれは苦手』というのを、もっと知ることができたらいいな、と思うんです。そのうえで、他の子のできないことを自分の力で補うことで補い合う、そんな空間を実現できたら嬉しいです」